（別紙 2）

審査の結果の要旨

氏名　景山　洋平

本論文は、哲学の出発点と目される原初的な世界経験としての「出来事」と、それを探究する「自己」との相関関係に着目し、ハイデガー哲学の構造と生成をその最初期から後期まで丹念に追跡することで、ハイデガーにおいて「出来事」と「自己」とがそのつどいかに「変容」し、思索が展開・転回したかを明らかにした極めて意欲的な労作である。

第 1 章では、「自己」がその内に投げ出される「世界経験」が初めて哲学の根本問題として自覚化される場面が、1910 年代の最初期の著作に即して検討される。

第 2 章では、初期フライブルク期から『存在と時間』に至る著作群における「解釈学的現象学」の変容を追跡することによって、世界経験を探究するハイデガーがこの経験を表立って反復するなかで、世界経験と自己の形相的本質を獲得しつつも、その顕在的事実性を取り逃してしまうありさまが際立たせられる。これにより、現存在の一般的構造としての「時間性」に基づく超越論的自己解釈が帰結するが、論者はこれを「根本経験における自己解釈の倒錯」と呼ぶ。

第 3 章は、いわゆる「形而上学」期の思想を、『存在と時間』期における現存在の超越論的自己解釈が、現存在の存在論的力能に先立つ「全体としての存在者」からの触発を承認せざるを得なくなる過程として位置づける。世界経験の解釈は、ここに至り、「全体における存在者」に受肉しつつその全体を問う現存在の「形而上学」に極まったとされる。

第 4 章では、ハイデガーの世界経験の探求が「形而上学」として完成したまさにその到達点において自己矛盾に陥り、「転回」せざるを得なくなるさまが、『カントと形而上学の問題』に即して明らかにされる。形而上学の根拠づけのために要請された「超越論的構想力」を、時間の生成の超越論的条件として発生的に探求する試みが、「時間の自己触発」として構造を静態的に探究する営みへと変質していく過程が、詳細に論じられ、絶えず取り逃がされてきたものとしての世界経験の本性にハイデガーが気づき「転回」していく瞬間が際立たせられる。

第 5 章では、「転回」後に新たにとらえ返される世界経験の在り方と、その真理を探究する自己のあり方が後期諸著作に基づいて解釈される。「現れ」と「隠れ」の二重性が発見され、これを探究する「自己」のあり方も根源的に「変容」すること、「全体としての存在者」が可塑的性格をもつことが明らかにされると共に、後期の中心概念のいくつかに関して、独自の解釈が試みられる。

以上のように本論文は、ハイデガー哲学の構造と生成を、出来事と自己との相関関係が変容していく過程として、ハイデガーの思索に内在的な仕方で動態的に明らかにしようとした、先行研究に類を見ない、極めて意欲的な労作である。500,000 字を優に越えると思われる本論文には、冗長と感じられる叙述がないわけではないが、第 4 章での超越論的構想力と時間の自己触発に関する解釈など、きわめて秀逸な考察が含まれ、第 5 章の後期ハイデガー解釈も独創的であって、全体として出色のものと評価される。よって、本論文は博士（文学）の学位を授与するに値するとの見解で、審査委員全員が一致した。